

【現代語訳】

長唄 元禄花見踊り

(主人公)

江戸への道を、都が春になって志賀の山桜がやってきましたよ。皆さん、花見の小袖に金箔を縫い付けたり、派手な模様も気にせず、格好いいなあ。

ほかにも、斧・琴・菊の模様を染め出して、謎掛けまでしてる人もいて、皆んな面白い思いの出で立ちで着飾っているんだね。

(女達)

さあ、振袖を着て、一緒に行こ。ほら、「フレフレ」の袖は、六尺布で仕立てた大振袖だよ。良いでしょ。

「鹿の子絞り」を着た岡崎宿のお女郎さん達は、裾に「八つ橋」の絵も染めているようよ。

ヤダッ、本当にそうなの？

ねえ、あなたの着物、紫色で素敵だね、色も濃いしき。

ヤダッ、そりやそうよ。

踊るのはネ、こんなふうには手先揃えて、

「ザンザの音は浜松、よんやき」って言う小唄だよ。

(女達)

春の桜と秋の月とは、どっちが都の眺めとして良いのかしら。

京都の姫君は素敵に「衣被き」を深く被って、桜や紅葉の名所の北嵯峨や御室にお出かけになるつてよ。うちらも、二条通りの百足屋さんが懲りにこつて編んだ真つ赤な紐を、打掛けの小袖に通して、桜の木に繋ぎましようよ。「疋田鹿の子」ブランドの小袖の幕が出来て、花見の席がカッコイイつてば。

目にも美しい小袖の幕を見て、中にいる私たちの顔を見たなら、なお良いつて思うに決まってるわ。

ヤダッ、そうだよね！

(男達)

花見するなら、郭通いをする時の、顔をかくす熊谷笠を持って行くんだぜ。飲むのは、湯飲茶碗のような「熊谷 盃」か、「武蔵野の大盃」じゃないといけねえ。チビチビやるもんじゃねえや。

月に兎が書いてある「和田酒盛の盃」は、思い差しの盃としてはもつてこいさ。黒い盃だから闇の中でよくわからないんだけど、

彼女が注いでくれるのは嬉しいわけよ。

腰に瓢箪と毛皮の煙草入れをぶら下げてき、酔って踊れば、

よい〜、宵よい、酔いやサー、てな具合よウ。

(主人公)

武蔵名物のような、いい月がでた晩は、お妻さんは頭に助六の粋な鉢巻きをして、短い蝙蝠羽織を着るんだ。反り無しの飾り刀にファッシュの四角い鍔をつけて差し、下男をお供に、男装して花見に行くのか。

とうちゃんは、絹の手ぬぐいで顔を巻き、編笠を前伏せにシャイに被って、踊りまくっていますねえ。

布地をたく杵も、小町踊りのシャレた道具になつてるよ。ああ、よいよい〜ヨイヨイ、よいやサー。面白いなあ。

(興業主)

おお、桜の見時ですから、人がどんどん入って来られました。

芝居口上が永当なら、花見の東叡は人の山です。

上野は花盛りです。私どもは皆、その上のを狙つて、

桜冥利の清水寺の舞台ように、新舞台に掛けております。

ぜひ、新富座の賑わいをお願い申し上げる次第でございます。

